
魔法少女リリカルなのは ~ 転生者は蛇遣い~

Mr.BLUE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生者は蛇遣い

【Nコード】

N4881X

【作者名】

Mr. BLUE

【あらすじ】

邪神に殺された少年が能力を貰って「魔法少女リリカルなのは」の世界で無双する話。（亀更新&駄文。おそらく期待するだけ無駄。独自設定、独自解釈あり。それでもOKと言う方はどうぞ。）

プロローグ（前書き）

見切り発車万歳。なんとか終わらせられようと頑張る。

ブローグ

ブローグ

ここは日本にとある町、海鳴市。地名にもある通り海に隣接しているが山もあれば丘もある。更には温泉宿などもあり、中々に豪華な町である。そしてその町の一角に喫茶店ある。

喫茶店の名前は『Blast of Wind』

直訳では『疾風』である。街中にひっそりと佇むこの店は有名ではないが常連が多い店であり皆、その絶品のコーヒーを求め、通うのである。内装が目立った所はなく、普通のテーブルに普通の椅子、普通のカウンターだが一つだけ珍しいモノがある。それは壁紙にデザインされた「風」の絵である。様々色彩で描かれたそれは明確なイメージを持たせることのない「風」として、常連の客に認識されていた。

カウンターの奥でせつせとコーヒーカップを拭いているのは「王
童虎 ワン ドウコ」

喫茶店だと言うのに黒いスーツを着込み、その黒い髪をオールバックにし銀縁の眼鏡をかけており、アジア系の顔はどこかに理知的な印象を与える。どこにいるサラリーマンだ、と言う服だ。正直言ってこの格好を見て喫茶店のマスターだと思う人は本当に少ない。

そしてそれを見ながらカウンターで煙草を燻らせている子供がいる。

年のころは小学一年に届くか届かないくらい。髪は真っ直ぐに伸ばしており黒い髪を一纏めにして後ろに垂らしている。服装はYシヤツにジーンズと言った普通の格好だった。顔自体はどこか悪戯小僧を彷彿とさせるような顔をしているが、どこことなく外来のモノを感じる顔立ちだった。

「マスター。本当に依頼とか来てないのか？」

ダレたように童虎に話しかける子供は机にべったりと頬をつけ全身で倦怠感を表していた。煙草は右手から灰皿に置き手をダラーンとさせていた。

「何度も言っている。ない」

「は〜。。。そっか」

その問いに童虎は迷うふりすら見せず答える。それを聞いた子供はため息を吐きながら更にその体を沈ませた。

「。。。」

「。。。 (フキフキ) 」

「。。。」

「。。。 (フキフキ) 」

しばらく無言の空間が続く。童虎は新たなカップを手に取り子供は新たな煙草を手に取っていた。しばらくして何も音がない空間に飽きたのか子供がまた童虎に話しかける。

「なあマスター。本当に何も無いのか？」

「ない。・・・あ、あった」

「本当か！」

バンツとカウンターを叩き飛び起きる子供に童虎は無言で咎めるような目を向けた。向け続けた。・・・次第に、子供は冷や汗をかき始めた。ダラダラと流れていく汗は額から顎を伝い地面に落ちていく。その中の一滴がカウンターにつけていたに落ちる感触が子供に伝わった瞬間、子供は頭を下げていた。

「・・・ごめんなさい」

「よろしい。少し待つ。今取ってくる」

「・・・はあ」

そういつてカップにコーヒーを注ぎ子供の前に置いた童虎は店の奥に向かった。童虎を見送った子供はドサツと音を立て椅子に座り一気に脱力した。それだけ童虎の視線には耐えがたいものがあった。

「ああ・・・コーヒーうま」

しばらくして出されたコーヒーを飲んだ子供は一言、そう漏らす。恍惚とした顔からは中毒なことが容易に想像できた。

「はい。これ」

コーヒーを呑みながら幸福に浸っていた子供だが、童虎が手に幾つかに束ねられた紙束を戻つてくるとその顔を引き締めた。

「どうも。なになに……。依頼人は月村 忍。ん？月村？」

その紙束を読み進めていた子供だが依頼人の名前を目に写したとき疑問の声をあげた。

「なあ、マスター。この家、もしかして海鳴にあるあの豪邸か？」

「そう」

「ふん。意外と、つてかすぐ近くだな」

そう言つて気楽に笑つた子供は「御馳走様。今日もうまかつた、マスター」と言つた後カウンター席から飛び降り店の扉に向かつて歩き出した。そして扉を開け出ていこうと子供が思った瞬間に童虎から声がかけられた。

「飛鳥。月村は吸血鬼。良く言われる。気を付ける」

「へー、吸血鬼。ん、分かつた。気を付けとく」

唐突にかけられた言葉に瞳を瞬かせた飛鳥だが少し皮肉げに笑つたがそのあと元の悪戯小僧の様な顔に戻り扉を開く。カランカランと扉にくくりつけたベルが鳴つたと同時にその姿は喫茶店の中から欠き消えていた。

「さてと。じゃ、Get Backers - 奪還屋 - の仕事、始めますか」

そう言って、飛鳥は走りだした。海鳴市有数の豪邸を構える、月村の家に。

彼の名前は「飛鳥・E・アインズ」。Get Backers - 奪還屋 - を営む、今年小学生になる、『転生者』である。

プロローグ（後書き）

うっわ、駄文。

感想ご指摘待ってます。

第一話（前書き）

完結できるんだろうか・・・？

第一話

第一話

『飛鳥・E・アインズ』は『転生者』である。いつの間にか死んでおり例の如く真っ白な空間でテンプレ的に能力を貰いマニュアル通り穴に落とされ新たな世界に産声を上げた。

そして紆余曲折あつて日本の某県の海鳴市で「Get Backers - 奪還屋 -」なる、仕事を始めたのだ。若干五歳と言つ年齢でだ。突つ込まないで上げて。

飛鳥が貰つたのは漫画「Get Backers - 奪還屋 -」の「美堂 蛮」のステータス。つまりその身体能力と邪眼、悪魔の腕である。・・・え、実力？そりやもう折り紙つきだよ？なんたつて能力を選んだ瞬間に神様の御好意により漫画「Get Backers - 奪還屋 -」の最強キャラの一角である「赤屍 蔵人」による地獄のトレーニングが幕を上げたから。あれだよ、飛鳥だつて最初は心底ブルつてたよ？だけどあれだもの。殺気なんかにビビつてたら一生終わらない訓練だもの。五日動けず、十日でようやく動き始め、二十日でようやく赤屍に向かつていった。すぐに斬り殺されたけど。死なないものね、神様のおかげで。だから思う存分戦つて、殺されて、生き返つて。究極の実戦勉強の中で培われた経験はしっかりと残っている。実際、飛鳥は前に一度、本物の殺し屋さんの殺気を浴びたことがあるが、毛ほども脅威を感じなかった。軽々と受け流したくらいである。

要するに「飛鳥・E・アインス」の實力は人として届き得ぬ領域にある、ということがわかれば万事OKなのである。

A c t 月村の屋敷前

飛鳥は今、依頼にあつた月村の屋敷の前にいた。屋敷の前には門が高々とそびえたち、何となく屋敷の前に立つ者に居心地の悪さを与えるものがある。……のだが、飛鳥の耳には気の抜けるおとが絶えず中から聞こえた。即ち、猫の鳴き声である。ニャーニャーニャーと沢山の鳴き声が聞こえてくる。一体どれくらいいるのだろうか？そう、思つてしまふほどの飛鳥の並はずれた聴覚は沢山の猫の鳴き声を捉えていた。

「……気にせず行くか。ん、チャイムは……これだな」

ピンポーン

「……はい、どちら様ですか？」

飛鳥がチャイムを鳴らすと少しして落ち着いた女性の声が聞こえてくる。飛鳥はその声に物怖じせず至って普通に答えた。

「え〜。依頼を受けた「Get Backers - 奪還屋 -」です。依頼の確認に来ました〜」

「・・・はい、少々お待ち下さい」

玄関先でしかも声を潜めることもなく、勿論周りに人がいないことを飛鳥は確認しているが、それでもその態度に対して不快な物を感じたのか、少し声の不機嫌になったインターフォンの女性のにあ〜、またやつちまつたか、と思った飛鳥は頭を掻きながら嘆息した。飛鳥としては基本的に依頼を確認しに行くと子供の容姿なのでどうしても嘗められるので常用的に汚い言葉を使っているのだが、それが相手を不快にさせてしまうこともよくあった。

「この口調やめた方がいいのか・・・?」

ポツリと呟く飛鳥だったがそれは何か大きな駆動音に遮られた。

ウィイーーン・・・

飛鳥の前の門が開いていく。その光景を見た飛鳥は一言。

「金がかかってんな〜。さすがは海鳴一の資産家ってところか・・・
・ところでこれ、入っていいってことだ〜な?」

どことなくずれた発言をしたあと、少し逡巡し結局気にしないことにしたのかスタスタと門を踏み越え、こちらも大きい玄関の扉に向かっていった。

月村家の当主、月村 忍は客に対応する応接室で傍らに二人のメイドと恋人である高町 恭也を置き玄関前の監視カメラから送られてくる映像を注視していた。今回、依頼をするのは不本意であったが今回の件はある程度の裏に通ずる月村の力を持つても解決できるかどうか定かではなく。更に腕が立つ恋人や知り合いがいるが本物の殺し合いの最中に送るには心配だ。故に蛇の道は蛇と言うことで、そこそこ裏で名が知れている「Get Backers - 奪還屋」なる者に依頼をしようと思ったのだが。

「・・・何？この子、すずかと同じくらいの年じゃない。もしかして遣いか何かかしら？」

「・・・そうかも知れない。さすがにこの年で、と言うことはないだろうが・・・。一応、警戒はして置くよ」

「うん。お願いね、恭也。ノエル、ファリン。貴方達も」

「畏まりました。ではファリン、私はお嬢様のお傍で警護の当たるので出迎えの準備をして下さい」

「は、はい」

表から入ってきた思わぬほど小さい子供に眉をひそめたが、すぐにその顔をやめ他の三人に声をかけ始めた。彼女の妹である、すずかは今日は外出させており心配はいらない。しかし

（この、子供。本当に遣いか何かだったら失礼な人ね……。自分で来ないで信用も何もあつたもんじゃないでしょう）

交渉に本人ではない人間が来るなど依頼をする側に対して失礼ではないだろうかと、「Get Backers - 奪還屋 -」が飛鳥だと露にも思わず、憤っていた。その様子を傍らで見ながら恭也は静かに警戒を深めていた。カメラから見える映像には依然として出迎えたファリンにここまで案内されている飛鳥が映っているが

（隙が全くない……。親父でもこうはいかないぞ……）

その体勢に隙がまったくないことや悠然と醸し出すその歴戦の空気を漠然とした勘で感じ取っていた。だが、それを忍に知らせることはしなかった。忍には交渉に集中して欲しいし、無闇に警戒を深めることはないだろう、そう恭也は思っていた。それに

（まだ当主になつたばかりなんだ。危険が迫つたらオレが守つてやるぞ）

こうゆう時に守つてやれなくて幼少のころから鍛えてきたのはなんだつたんだ。今まで鍛え磨いてきた武技はそう簡単には破れない領域に達しているだろう確信が恭也にはあつた。それはノエルも同じだった。

だが、二人はこの見通しがとつてもなく甘かつたことを後に思い知ることになる。

玄関の扉をあけると同時にメイド服を着たファリンに出迎えを受けた飛鳥は客間に案内すると言う言に従い、ファリンのあとを追って行きながらも屋敷の中を観察していた。

（ここに来るまで確認できた監視カメラが五台。もしかしたらもつとあるかもな）

随分警戒されてるもんだなあ、と嘆息した飛鳥は案内された客間の扉を開けた。

そこには優雅にカップをすする忍と傍に控えるノエル、その逆隣りには飛鳥をを鋭い視線で睨んでいる恭也がいた。扉が開くと同時に飛鳥に気づいたのか忍は優雅に微笑み・・・地雷を踏んだ。

「始めまして。「Get Backers - 奪還屋 -」の遣いさん。私は月村 忍。月村家の当主で今回の件の依頼人よ」

始めの一言でピキツと言う音がしたのだが忍はそれに気づかず案内されるがままに座る飛鳥に、肯定の意を感じたのかそのまま喋り続けた。・・・静かに少しずつ、だが確実に怒気が飛鳥から溢れ出ていた。

「それで、貴方のお名前は？」

につこりと笑い子供に（事実子供なのだが）聞くように飛鳥に問う。だが、飛鳥は黙りこくって何も発さない。それを怪訝に思ったノエ

ルと恭也だったがそれに気づく様子もなく忍は続ける。

「……」

「それにしても……」「Get Backers - 奪還屋 -」ってこんな子供を使いに出すような所なのかしら？何か酷いことでもされてるの？」

忍の頭には飛鳥自身が「Get Backers - 奪還屋 -」と言う可能性は頭から排除しているのか、子供を相手にするような態度を崩さない。そして度重なる勘違いにさすがに憤りを感じたのか、飛鳥はテーブルを思い切り叩き、立ちあがった。驚いた恭也が腰を浮かせる中飛鳥は叫んだ。

「……（プチッ）遣いじゃねえ！オレが依頼を受けた「Get Backers - 奪還屋 -」だ！」

叫んですつきりしたのか飛鳥はふーと息を吐き椅子に座りなおした。それに一先ず警戒を緩めたのか、ノエルと恭也も戦闘態勢を解除する。だが客間の中でただ一人驚いている人間がいた。

「……えっ。……本当に？」

忍である。目を見開き手で口を覆い静かに驚いていた。

「本当に」

「えっ……と、失礼しました？」

「うむ」

思わず謝る忍に飛鳥は鷹揚に頷き返した。

先程の魂の絶叫から数分。ファリンが持ってきた紅茶を飲み気を取りなおして飛鳥と忍は依頼の確認に入っていた。

「では改めて、私の名前は「Get Backers - 奪還屋 -」のエリオとお呼び下さい」

「エリオく……さんね。じゃあこつちも。私の隣に居るのがメイドのノエル。逆の方は高町 恭也。まあ、ボディガードの様なものかしら」

飛鳥は自己紹介もそこそこに依頼の確認を始めた。ちなみにエリオとは「飛鳥・E・アインズ」^{エリオット}の引用である。

「それで今回の依頼の品はなんですか？依頼書に書いてなかったってことは言いにくいこと、または、聞かれたくないことでしょう」

「ええ、そうなんだけど……別に畏まらなくてもいいわよ？」

「そうですか。では失礼して……。で、結局なんだ？オレとしてもブツが何か分からなきゃ何を準備すればいいのかわかんねえ」

「そうね……」

許しを得た途端にえらく不遜な態度にノエルは思わず顔をしかめたが忍は気にしなかったようなので何も言わない。忍は少し迷ったあとポツポツと語りだした。出来れば黙秘しておきたいことなのだが今回の事はこれを言わなければ始まらないのだ。

「貴方は吸血鬼、って信じるかしら？」

その問いに眉を潜めた飛鳥だったが忍の問いがふざけているのではないと分かったのか、真面目に回答した。

「・・・まあ、信じるか、信じないかでいえば・・・信じる、だな」

「そう・・・」

答えた飛鳥に忍は一瞬疑う様子を見せるがすぐに続きを話しだした。

「・・・私たち、月村の一族は「夜の一族」。吸血鬼の血を引いています」

唐突なカミングアウトに飛鳥は反応を示さず黙して続きを促す。

「続けるわよ？・・・月村の家系は不本意だけど吸血鬼の血を引いている。だから私たちは人間に戻る、いや成る、と言うのかしら。そのためにお金をお沁みなく使って研究していました。・・・「夜の一族」と言われる由縁の「吸血鬼の血液を」」

「しかし先日。その研究所に侵入者が入りました。その人物によって「吸血鬼の血液」は盗まれ、今日から五日後近くの湾から密輸船に乗せられ海外に持ちだされるようです」

「今回の依頼は「吸血鬼の血液」の奪還。そして出来るならばその組織の情報。勿論、情報については買い取りします」

言いたいことは全て言った忍は紅茶で喉を潤し、飛鳥の返事を待った。・・・と言っても受けさせないと言う選択肢は忍の側にはないのだが。

対して飛鳥は依頼の内容について費用、危険度、情報の虚実、その他諸々から吟味し、最終的な結論を約一分後に口にした。

「断る。情報が不鮮明すぎる。その組織が巨大ならばオレの周りにも危害が及び可能性がある。残念だが他を当たってくれ」

そう言って紅茶を飲みほし席を立つ飛鳥。真っ直ぐに扉に向かう飛鳥だが唐突に歩みを止めた。いや、止めざるを得なかった。なぜならば微塵も隠す気がない闘気が飛鳥に向かって放たれていたからである。

「そう・・・でもこっちはいそうですか、とはいかないのよ」

忍が言葉を発した瞬間、その両隣の人影が欠き消えた。

月村家に仕えるメイドのノエルは戦国時代の侍女の様に武術を嗜んでいる。と言ってもそれは嗜むと言う領域ではなく既に一流の域に

おり、恭也とて恭也の師であり父親でもある高町 士郎から古武術「永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術」の指導を受ける猛者である。

両者は忍の声がかかった瞬間飛鳥に向かって走りだした。その速度は既に常人には捉えきれない速度に入っており忍から見ても二人は飛鳥の前に瞬間移動したようにしか見えなかった。

ノエルは懐に忍ばせていたナイフを取り出し飛鳥の首を刈らんとその凶刃を振りかぶり、恭也は自らの流派の奥義であり神速を持つて飛鳥に接近、椅子の下に置いていた小太刀二刀を上から振りかぶっていた。

殺^とった　　！

ノエルと恭也はどちらとも得物を振りかぶった瞬間そう思っていた。だが二人の確信はすぐに驚愕へと変わる。

飛鳥はまず、二人にも知覚できない速度で恭也を蹴り飛ばす。その蹴りをなんとか腕で防ぎ吹き飛ばされた恭也は信じられないと言う目で飛鳥を見る。だが、その間にもノエルの凶刃が飛鳥の首に迫る。

（もう、止められない・・・！）

恭也とノエル、二人とも少し物騒なことを考えていたが実際に飛鳥を殺す気はなく寸前の所で止める気だった。だが、ノエルは恭也が蹴り飛ばされたことに驚き既にそのナイフを止められるポイントを

過ぎていた。

だが、飛鳥はいとも簡単にその危機を脱した。自らの首の迫っていたナイフを右手の五本の指の腹、そこで全て掴むとそのままナイフを指の力だけで砕き伸ばされたノエルの腕を掴むを思いきり床に投げつけた。

カハツ、と背中から地面にたたきつけられ苦悶に身を擦らすノエル。恭也はそれを見てより一層警戒を深め神速を発動、飛鳥の周りを高速で旋回し始めた。

欠き消えた恭也を見て飛鳥はため息を一つ吐いた。別にこの程度の速度、飛鳥にとってさして脅威でもないしスピード勝負を選んだって良いのだがそれは疲れる、と言うことで飛鳥は違う手段をとった。

「いくらスピードが早くてもそれが必ず強さに繋がるわけじゃねえ、
つと」

そう呟いた飛鳥は地面を思い切り蹴った。震脚。屋敷全体が揺れるような規模の震脚は容易く恭也の動きを止めた。

「バカなっ・・・!!」

「そうゆうことで出直してっい」

恭也が動きを止めた瞬間、恭也の目の前に現れた飛鳥は恭也の腹を思い切りぶん殴った。

「絶招・・・!!」

ドゴンツ、とおおよそ人体では発しえない音を出しながら恭也は床に崩れ落ちた。

第一話（後書き）

長かったんでいったん切ります。それと作者はとら八の設定が良く分からんですので、高町一家が習っていると云う「御神流」なる物の詳細を教えてくださいと助かります。

感想ご指摘待ってます。

第二話（前書き）

短くなった。これならまとめても良かったかも……。独自解釈多数。・・・と言っかそれしかない。矛盾点はご勘弁を。グロ注意。

第二話

第三話

頭上で揺れる軽く百万は下らないシャンデリアを見、目の前で崩れ落ちる一人の青年と少し離れた場所で苦悶の声をあげているメイドを見、さつきまで座っていた椅子の向かいに座っている今もなお信じられないと言うことをまったく隠そうともしない女性を見、飛鳥は心底下らない、と言う顔をしながら客間の扉に向かう。だが、向かう途中にまたしても声をかけられた。

「・・・待ちなさい」

「なんだ？」

椅子に座る女性 月村 忍は床に倒れている二人 高町
恭也とノエルを心配そうな顔でみたあと悠々を扉に向かう飛鳥を呼びとめた。

その屈辱と覚悟が混じった目を赤く染めながら、自分が日頃から忌々しいと思ってやまない吸血鬼のあかしである、**魔眼**を発動させながら飛鳥の目を見た。

月村 忍の誤算は三つ。

一つ。飛鳥を、『Get Backers - 奪還屋 -』を子供だと思
って侮ったこと。

一つ。自分の味方である二人を信じ過ぎていたこと。

そして最後。それは 自分が、最も忌むべき力を使い飛鳥を屈
服させようとしたことである。

忍は。『夜の一族』、月村家の当主。月村 忍は憤っていた。

なにが子供なら大丈夫だ。なにが『本物』の遣いだ。侮っていたの
は、見くびっていたのは自分ではないか。 あ の、血と硝煙と
悲鳴と絶望が響く『裏』で名を馳せているということにもっと気を
つけてしかるべきだったのだ。

実際、それは床で倒れている二人ともう一人のメイドであるファリ
ンにも言えることだが、それを忍は考えない。これは全て自分のせ
いだ、と抱え込む。これがもし容赦情けとは無縁な人間だったら？
それを考えるだけで今も身を焦がしている後悔の炎が彼女を更に焦
がす。それを恭也達が望まないにもかかわらず。

苦痛に顔を曇らせ、呻いている二人は忍に言葉を発さない。いや、
発せない。激痛に身を擦らせ呼吸をすることさえ困難な二人は忍に

励ましの言葉さえ言えず、愛する人（主）に逃げると、叫ぶことすら、出来ない。

ここまで、話してしまった。なら消失点（しつひんてん）はもう過ぎた。折り返し地点は地の果てだ。

月村を、『夜の一族』を、吸血鬼（きゆうけつ）を、化物（けぶつ）を知ってしまった、教えてしまった。彼には、飛鳥には。口止めを、死を。『死人に口無し』の体現を。無理だ。手札（てしやく）（味方）はいない。倒れた。倒れている。ファリンを？無理だ。彼女は戦闘に向いていない。自分で？荒唐無稽。彼には一分の隙も見当たらない。それどころか自分では彼に触れることすら、出来ないだろう。

ならば、吸血鬼としての忍（しの）びなら？

吸血鬼の、今もこの体に流れる血には様々な恩恵（おんゑ）（呪い）がある。その常識外れな身体能力（しんたいのうりょく）（しかり）、その桁外れの回復能力（かふくのうりょく）（しかり）、そして『魅了（めいりやう）の魔眼（まがん）』（しかり）。

吸血鬼には弱点があつてあまりある。日の元を歩けず、水を渡れず、ニンニクを嫌い、十字架を恐れ、心臓に杭を穿てば死ぬ。

だが、それを補つてあまりある能力が吸血鬼にはある。

その最たるものが先程挙げた、人の体を簡単に引きちぎる膂力、身体能力である。その次は？霧になる？犬や蝙蝠に変身する？血を吸う？

違う。それは違う。

それは魔眼だ。そう、魔眼。目を合わせれば　それだけで事足りる。目線を合わせる。その誰でもしそうなそのほんの仕草で吸血鬼は人間を自分に従う畜生に成り下げる。

忍は、その魔眼を、その恐ろしい目を使った。使ってしまった。吸血鬼が嫌いな自分が吸血鬼として力を行使する。それが忍にはたまらなく気持ち悪かった。だが、これで我が家の私の一族の安全は保障される。後は魅了されこちらの命令に従う飛鳥（傀儡）にどこから飛び降りさせ自害させれば事足りる。　いや、使った、使ってしまったなら。堕ちて、堕ちてしまったのなら。その力を使うべきだろう。

声にならない悲鳴が忍の喉から迸る。杭で手足を固定されてもなお、体を必死に動かそうとしながらあらん限りの力を集め喉から声をあげていた。痛い痛い痛いいたいいたいイタイイタイイタイ
!!!

ドスッ!

「 ツ!?????!?!????? 」

はたして、その声とも言えないくもった声を漏らすことすら、忍には出来なくなった。喉に刺された真っ白な杭が忍の血で染まっていく。壁から垂れた血と喉から吹きあがる忍の血で既に床には血の池ともいつていい様相を呈していた。

「ふうん・・・吸血鬼ってのは本当なのか。これなら出血多量で死んでもいいくらいなのに」

そこに一際大きな杭を引きずりながら持つてくる飛鳥が感心した風に呟く。血の池に足を踏み入れた飛鳥の靴には血が大量に張り付きネチャネチャと粘着質な音を立てている。それが、忍には死神の足音にしか聞こえなかった。

「ま、いくら吸血鬼でも心臓に杭を打てば死ぬだろ。じゃ、おさらばだ吸血鬼」

静かに飛鳥は忍の血で濡れた大きな杭を忍の心臓に宛がう。

ああ、もう痛みを感じることもすら億劫ね。

間近に忍び寄る死を目前に忍はただ静かに目を閉じた。

世界に罅が入った。

「 ジャスト、一分だ」

忍はおそろおそろ目を開いた。

「悪夢あくむは見れたかよ」

目を開けたその先には不敵に笑う飛鳥の姿があった。

「大丈夫か！？忍！？」

「忍お嬢様！お体に異常は！？」

自分を心配する二人の声がどこか遠くに聞こえた。

「要するに全部、試していたと言つたのね貴方は」

ブスウとした顔をしながら忍はそう言ったあと頬のついでにふた

筋の痕を隠しながら新しく入れてもらった湯気が立つ紅茶に口をつけた。

「中々にきいたろ？オレの『邪眼』は」

「ええ、そりゃあもうたつぷりと」

今までの所業に不機嫌さを隠そうともしない忍は内心で安堵していた。

なんでも恭也ノエルがノックアウトされた所までは現実だがそこから先は夢だったらしい。と言ってもとびっきりの悪夢だが。

だが、それでも良かった。忍にとって自分が吸血鬼として力を振るうという現実を夢に変えてくれたことは忍にとって幸이었다。思わず涙を流してしまうほどには。

なんでも、彼の邪眼とやらは目線を合わせた相手に一分の幻想ゆめを問答無用でみせるらしい。ならば何故忍の方は効かなかったのかと忍は飛鳥に聞いたが飛鳥は

「格が違うんだよ、格が」

としか言わなかった。忍は納得しなかったが『蛇遣い座 アクスレピオス』直伝の邪眼と吸血鬼とはいえ血が薄まっている忍では勝負にならないことを知る由もなかった。ちなみに恭也とノエルが回

復したのはその一分の間に看病したのだ、飛鳥が。

「最初は意味がわからなかったけど、力の差は分かっていたし忍の様子には心配したが彼は「ちよつとお灸を据えただけだ、命の危険はねえよ」といったんだ。だから、まあ、害はないかな、と」

そうゆうことらしい。飛鳥を簡単に信じる二人もどうかと思うが呆然自失、身体衰弱していたのだ。許してあげる。要するには二人はまず忍の安全が第一だったのだろう。

「それで貴方は何故こんなことしたのかしら？ 答えなさい。・・・
答えないと捻りつぶすわよ」

据わった目で見られ殺気を飛ばされている飛鳥はどこふく風と言った様子で受け流し忍の問いに答えた。

「情報の確認と依頼人の誠意を見るため。あなたの言ったことはあなたが言う「吸血鬼の血液」がないと矛盾する。なら、どうやってそれを確かめる？」

「もし本当にあんたが吸血鬼ならその情報を秘匿しようとするはずだ。オレにばらされてもメリットなんて何一つないからな。なら後は簡単、そばにいる二人でオレを抹殺、または脅迫」

「だがそれが出来なかった。ならば他に違う力をおもうはず。誘うためにゆっくり扉に向かった案の定。あなたの目はそれ（吸血鬼）を証明するのに十分過ぎる」

「誠意についてはまあ、合格と言うか・・・期待以上だったな。あなたの話じゃ別にわざわざ「吸血鬼の血液」と言わなくても事足り

る。例えば開発中の新薬とか大事な研究成果、とかな。打ち明ける必要のない真実を打ち明けるあんたには誠意も確認できるし、その姿勢は信用も信頼も出来る」

「変な話だがこれも性分でな。勘弁してくれ。それと依頼は受ける。その奪還、この「Get Backers - 奪還屋 -」が請け負った」
依頼人を試す仕事人なんて論外。誠意の所に関しては忍の油断と言
うか迂闊さがあったが、別に損はないのでそこは忍は黙っていた。

こうして嵐のような跡を残しながら二人の交渉は幕は閉じた。

mission 「吸血鬼の血液」の奪還。当組織の壊滅または
情報。

第二話（後書き）

かつてここまで忍に強く当たったSSがあっただろうか？
吸血鬼に関してHELLSINGを参考していますが華麗にスルー
で。

誹謗中傷はご遠慮ください。感想ご指摘待ってます。

第三話（前書き）

キャラ紹介はいつにするべきだろうか？それともする必要はないのだろうか？

第三話

第四話

Act 海鳴センタービル・屋上 深夜〜早朝

海鳴センタービル。海鳴市が都市発展の象徴として予算二億円をかけた250Mという超高高度を誇るビルである。中にはショッピングモール・レストラン・スポーツジム・ゲームセンターなどが乱立しており近隣の休日は近隣の市町の人間と海鳴市の人々でいっぱいになる。夜になると七十階を最高とする海鳴センタービルの最上階からの夜景、と言っても大したものではないが、を楽しむためのカフェテリアが開いており夜遅くまで喧騒が絶えない。そんなビルの屋上にとある子供がいた。

「・・・まったく、なんでこんなことしなきゃいけないんだか」

ぼやくようにその言葉を言い放った子供・・・飛鳥は背中に背負った子供の丈には不釣り合いなりユックを担ぎなおし小さくため息を吐いた。

事の発端は昨日に遡る。

飛鳥は依頼を受けたあと、そうそうに計画を建てていた。期限は五日間。今回奪還を依頼された‘ブツ’は四日間、港の倉庫に厳重に保管されている。最新鋭の警備装置ばかりで固められていたそこに忍び込むのは、一昔前ならまだしも、飛鳥が知らないモノが多すぎるために入ることを諦めた。・・・実際、飛鳥なら力技で行けるのだが態々面倒くさいことをする必要もないとそうそうに諦めた。

得てして

得てして人間とは目標をもうすぐ達成しそうになると気が緩むものである。ならば、と飛鳥は四日間を諦め、‘ブツ’を船に乗せたあと、そこを狙うことにした。今回、持ち出すために選ばれたのは小汚い船ではなく、豪華客船とも呼べる巨大な船だった。

一般的にそうゆう類の船に乗ることがないような人が思い浮かべる物と比べると小ぶりだが、それにしても十分過ぎる大きさである。だが外装はそうでも中は海外に輸出する商品と乗組員だけしかおらず、乗客と言える物は存在しない。

タイムリミットはおそらく四十分前後。今回の船の速度は24.0ノット。1ノットは、1時間に1海里進む速さと定義されている。現在の定義では1海里（国際海里） 〃 1852メートルである

ので、1ノットは1852メートル毎時だ。つまり一時間で約二十
三キロメートル進む。通常、船に乗せられている救急艇が行けるの
は約二十キロメートル。ならば最悪の場合はよしんば五十分と言っ
たところだろう。濡れてもいいのなら泳いで太平洋渡るくらいは飛
鳥は出来るのだが、濡らすわけにもいかないので救急艇による脱出
ヘリの手配でもしたいものだが、それはさすがにばれてしまう。

以上が、喫茶店『Blas t of Wind』のマスター、兼、
情報屋も兼ねている王^{クワン} 童虎^{トウコ}が飛鳥に提供してくれた情報だ。

飛鳥からしてみれば相も変わらず一体どうやってこんなモノを仕入
れてくるのか不思議でたまらないのだが、それは情報屋と言うモノ
を営む全ての人間に言えることだろう。

だが、童虎を持ってしても分からなかったのは、‘ブツ’を奪った組
織と人員。そして乗組員は全員買収されていたことである。

と云うか仲介屋や情報屋、並はずれた戦闘技術を持つ童虎は一体何
者だ。

そして五日目の早朝、まだ朝日が出ないような時間に出港することを知った飛鳥はその半日前に忍び込もうと思ったのだが、まあ、いるいる。警備の黒づくめが沢山。誰か一人いなくなっても分らないようなものだったが飛鳥が話を聞く限り何か異常があったのならすぐにわかるようになっていいるらしく。それを回避するには相当な数を掃討しなければいけないので不必要な殺人はしない主義の飛鳥は歩いての侵入は断念し、空からの手に変更したのだ。

そして時間は最初に巻き戻る。

飛鳥はリュックを降ろし、その中に入っていたパーツを組み上げていく。

ビルの屋上の壁に立て掛けられた二等辺三角形の様な形状をしている物は知っている人がいれば「ログロウイング」と言うだろう。

ほどなくして、それは完成した。

「ハングライダー」

それが今回、船に乗り込むために飛鳥が入手したものである。

ハングライダーの速度と言うものは本来、地表あるものを目標に降りれるようなものではない。巡航速度は20 km/hから130 km/h程度。はつきり言って、無謀すぎる挑戦だが・・・飛鳥はそれを力技でなんとかする気らしい。こいつ、本当に人外である。

「じゃ、行きますか。この無武装国家で対空兵器がないことを祈るけど・・・」

朝日がもつすぐ出るか出ないかと言う黎明の時間。そういつて、飛鳥は助走をつけ僅かに張り出されたビルの縁から飛び出した。

ヒュウウウッウウウ・・・

飛鳥の耳元でハングラライダーが風を切るあと耳に届く。その飛行は危なげなくと言うモノとは程遠く、グラグラと揺れ安定性など欠片もない。当り前だ。本来、子供ともいえる飛鳥がのる乗り物ではない。成人した大人でさえ危険なのだ。それを安定してないとはいえそれを繰る飛鳥のバランス感覚が凄いと云える。

「・・・あれ、だな。時間的にはギリギリ。しっかしこれ。安定しないな・・・最悪、ブチ壊していくしかッ・・・！」

飛鳥の目に例の船が見えはじめたとき、グラグラと揺れていたハングラライダーを操ろうしながら船を見たとき戦慄した。何故か。それは飛鳥が危惧した対空兵器が本当にあつたからである。

『JM61-M』

日本の海上保安庁の巡視船や、海上自衛隊の掃海艇に搭載されている日本がライセンス生産し、戦闘機に搭載されていた物を、艦に乗せるために新開発したものである。元は毎分600発を発射されるようなバケモノ銃だがそれを毎分450発〜500発までに落とし薬莖を回収できるように改造されている。

「まっずー!やばいやばいやばい!ここで降りるしか・・・!・・・?・・・何故撃つて来ない?」

当然の帰結で多大な破壊を撒き散らす兵器を前に迷いなく海に飛び込むことを選択しようとした飛鳥だったが相手に何の反応もないことを疑問に思うと甲板の様子を観察し始めた。

「・・・日が出てなくてもライトはある。見えないはずがねえ・・・

」

人の姿がまるでなかった。人の姿が確認できず、視認できない。事前の情報では少なくとも数の乗組員を確認した飛鳥だが、飛鳥の目には人つ子一人映らなかった。

「・・・僥倖なのか。畏なのか。どっちにしる、降りて見なければわからねえ、ってことか。めんどくせえ」

畏の確立の方が高い。せつかくの装備があるのに使わなければ意味がない。可能性としては職務怠慢、内乱、畏、それとも飛鳥以外に誰かいるのか。一番確立が高いのはやはり畏の類だが・・・

「・・・行ってみりゃ分かるってか、クソったれ」

はあ、とため息を一つついて飛鳥は船の上に差し掛かった瞬間に固定用ギアを外し船の甲板に降り立った。

第三話（後書き）

短いツスね。なんか迷走してます。

ハンゲライダーやバルカン銃に関しては華麗にスルーしてやってください。

感想ご指摘待ってます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4881x/>

魔法少女リリカルなのは ～転生者は蛇遣い～

2011年12月7日00時57分発行